

主より  
強烈 519  
(武烈天皇)  
等閑 1643P  
強く輝いたこと

3,186P  
天照大神  
神功皇后  
3242P  
3243P  
同文

3/3  
64年に神武天皇にたぐない  
3348P

# 第六十四章 第二期二朝時代の幕開け

神日本磐余彦天皇(神武天皇)

さて、これから又、本当にあつた事なのか  
どうか定かならないことを述べることになる  
■継体上皇が、武烈上皇とともに西の国の  
都に到着されたのは西暦五二八年末頃のこと  
であつたろうか。(第一表参照)  
■天上の国の古京に参内した継体上皇は、  
天照大神(神功皇后)  
の靈前に額衝き、事の顛末を御報告され  
止むを得ないことであつたとお語りになつた  
そして、こう仰せられた

その昔の御世には、天上の国に天照大神  
降りて東国に月が震しく輝いておりました  
ところがいつか、天上の国の天照大神は  
ややもすると等閑にされ、東国の月ばかりが  
強烈な光を発するようになったてしまひました  
とはいえ本来、月があまりにも強く輝くこ  
となど、あつてはならないことなのです。



元元 212 119

元元 212 937  
領らす元1134

3.187

隋書倭69

今より以後、二朝の時代の<sup>（在）</sup>り方を、改め  
たいと存じます。

曰天<sup>（天）</sup>曰天<sup>（天）</sup>の国<sup>（天）</sup>の大王を曰兄<sup>（兄）</sup>と<sup>（兄）</sup>し、  
曰曰<sup>（日）</sup>曰<sup>（日）</sup>日本<sup>（日）</sup>国<sup>（日）</sup>の大王を曰弟<sup>（弟）</sup>と<sup>（弟）</sup>爲<sup>（弟）</sup>し

ましよう

\*<sup>（注）</sup>この<sup>（注）</sup>に<sup>（注）</sup>は<sup>（注）</sup>参<sup>（参）</sup>考<sup>（考）</sup>先<sup>（先）</sup>述<sup>（述）</sup>の<sup>（述）</sup>と<sup>（述）</sup>、<sup>（述）</sup>よく知<sup>（知）</sup>ら<sup>（知）</sup>れ<sup>（知）</sup>て<sup>（知）</sup>い

ると<sup>（と）</sup>あり<sup>（と）</sup>隋<sup>（隋）</sup>書<sup>（書）</sup>倭<sup>（倭）</sup>国<sup>（国）</sup>伝<sup>（伝）</sup>に<sup>（伝）</sup>

「倭王は、天を以て兄と爲し、日を以て

弟と爲す。云々」

と記されている。

継体上皇は、さらに言葉を継ぎ

「私は、これから日<sup>（日）</sup>曰<sup>（日）</sup>日本<sup>（日）</sup>国<sup>（日）</sup>に<sup>（日）</sup>赴<sup>（赴）</sup>き、

八紘を掩う大王となつて、元元を治めるこ

とに致します」

と言われた。（神武即位前紀の末尾参照）

つまり、

継体上皇は、いったん西の国の大王の位

を退いたとはいえ、いま重祚して、東

の国の大王になろうと決意された

と想察される。（第1表参照）



いさぎ 紀上 190<sup>8</sup> 推橋 190<sup>8</sup> つか 元 1476<sup>8</sup> P 珍房 641<sup>8</sup> 曲成 641<sup>8</sup> 紀上 190<sup>8</sup>  
 末小林 494<sup>8</sup> いちはば 下元 1180<sup>8</sup> 3, 188<sup>8</sup> P 641<sup>8</sup> 856<sup>8</sup>  
 紀上 190<sup>8</sup> 紀上 213<sup>8</sup> 辛酉年 → 3075<sup>8</sup> 527<sup>8</sup> 磐井の乱 終結  
 宇治谷上 84<sup>8</sup> 3186<sup>8</sup> 528<sup>8</sup> 641<sup>8</sup> 3187<sup>8</sup> 12<sup>8</sup>

神武天皇（後期継体天皇）の東遷

あるいは、継体上皇が日刃日本国に大  
 王にならうと思ひ、決意した年（五二八）の翌  
 年（五二九）のことであつたろうか。

神武天皇（後期継体天皇）は、自ら諸皇子

舟軍を率いて、東の国へ向われた。

速吸之門（紀では豊予海峡を指す）へおいでになった時

一人の漁人が小舟に乗つてやつてきた。

神武天皇は、その漁人を呼び寄せ、お尋ね

になつた。

「お前は誰かし

」私は國神で、名を珍房と申します。かつ

て御肇國天皇を御先導申し上げた珍房の末裔で

す。この曲浦（別府湾。帆状にはら

んだように見える入江）へ魚釣りにきていた

ところ、天神の御子がおいでになるかと聞

きまして、このようにお迎えに参りましたし

「お前は、私の爲に道案内をしてくれるか

」よろこんで御案内いたしますし

天皇は命じて、漁人に椎竿の末（いちばん

下の根元の方）を差し出させ、掴まらせて舟



3260° - 3/6 版  
3262° - 1/ 版 3,189°  
3262° - 1/ 版 3,189°

3262° - 1/ 版 3,189°  
3262° - 1/ 版 3,189°

3262° - 1/ 版 3,189°  
3262° - 1/ 版 3,189°

3262° - 1/ 版 3,189°  
3262° - 1/ 版 3,189°

中に引き入れ、水先案内をさせた。  
ニニに神武天皇は、特に珍彦に名を賜って  
推根津彦とされた。(神武即位前紀 甲寅年条)  
ただし、橋根津日子とも呼ばれる。  
た。(神武記)  
木な お、神武天皇は、珍彦(推根津彦)を以  
て、倭国造とされた。(神武紀二年二月条)  
\*旧事紀、国造本紀には、ほぼ同様ながら  
「檀原朝御世、以推根津彦命一初為大倭国  
造」  
とある。  
\*そして、推根津彦は、倭直部の始祖で  
あるといひ、  
「(珍彦に)特に名を賜ひて、推根津彦と  
す。此即ち倭直部が始祖なり」  
と記されている。(神武即位前紀 甲寅年条)  
\*珍彦(推根津彦)が、大倭国(肥後  
国)・大和国(どちらでお仕えしたのか)  
\*珍彦(推根津彦)のはるかた子孫  
達は大和国でお仕えしていたのだから。



うかい 176P

宇佐上84P 宇佐上190P 中程 3348-1/2, 3/2

改行 宇佐上84P 宇佐上190P 中程 3348-1/2, 3/2

同文 紀上191P 11 3199 記(四) 108 地籍簿 2097.1577 3199 138

3,190P

天つき 改行

天つき 改行

宇佐津彦(中臣氏の傍系筋)  
別府湾の北側に内みをおひて突出する国東半島の東岸をぐるりと迂回した神武天皇の一行は、宇佐国へと至った。そこには、宇佐国造の先祖の宇佐津彦という者がいた。

宇佐津彦と宇佐津媛(の兄妹)は、宇佐川(馬館川)の川上に、日一柱騰宮(足一騰宮)を造り、おもてなしをした。(記・紀)

なお、日一柱騰宮(足一騰宮)がどんなものだったのか詳らかでなく、次のような説が提示されている。

①本居宣長は、古事記伝において、

「川岸の山へ片かけて宮を構え、一方は流の中に大きな柱を一つかけて作った宮であろう」という。(「日本書紀」(上)日本

古典文学大系、岩波書店、一九一頁注一二参照)

②「足一騰宮は、足一騰宮は、床が低くて一足で上れる宮殿という意味なのだろう。慌しく造ったので、簡単な御殿になったのではなかろうか」ともいう。(「古事記」新潮日本古典集成、

新潮社、一〇九頁注九参照)

(\*)



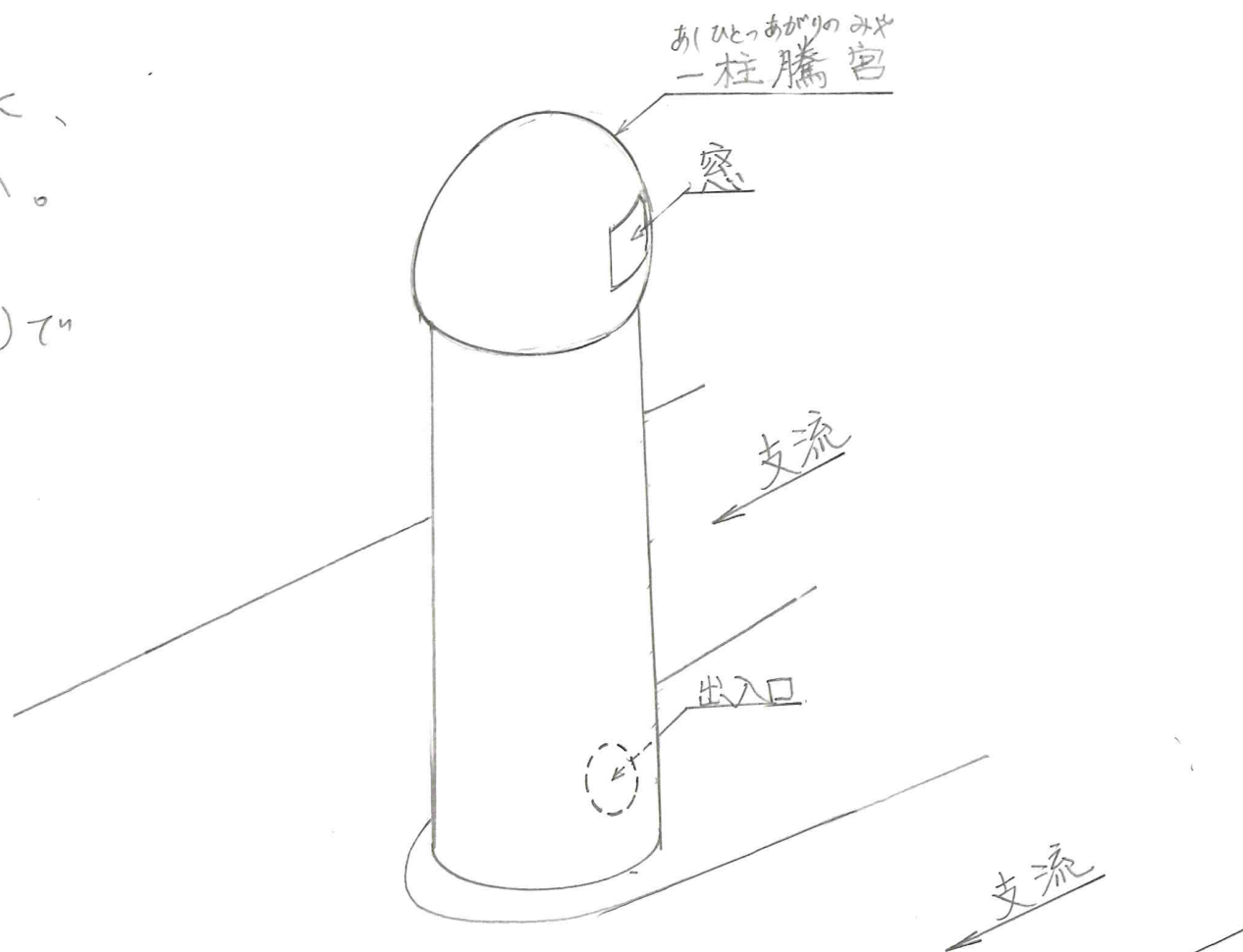




3,191<sup>P</sup> 2/3

・右頁の右上(1/4)に、  
大きく掲載下さい。

・太い線(0.4ミリ)で  
トレースして下さい。



第415図 『あひつあがりのみや 一柱騰宮』 想像図 133<sup>P</sup>

H28(2016) 1.23 作図 ㊥



972-1/2  
3行~

961.971? 3501P  
あけろ

3.19/3

紀上 190年4行 紀上190 宇治合上84P  
12.12 31906行

宇治合上84P  
紀上190 中程  
大層 3199P2行

と思われ。 ほう、これはこは、何を突くばかりの  
目出度いことよし 継体上皇（神武天皇）は、その趣向を、大  
変お喜びになつた。と拝察される。 誰か  
うむ。それならば、誰かと  
誰かをめあわさずばなるまい。 継体上皇は勅して、  
宇佐津媛を、継体上皇の侍臣である天種  
子命（中臣氏の遠祖）に賜妻せられた。と想像される。 本家筋  
「是の時に、勅して、菟狭津媛を以て、  
侍臣天種子命に賜妻せたまふ。天種子命は、  
是中臣氏（本家筋であらう）の遠祖なり」とある。  
（神武即位前紀参照）  
とこころで先に、伊香刀美（天兒屋命）は、天照大日靈尊  
（二代目の天照大神）を娶って、男の子二人  
せの子二人をもうけた。  
兄曰、意美志留は、中臣鳥賊津使主（中臣  
の本家筋）の名と年とを継いだ。  
弟曰、那志登美（中臣氏の系図に伊賀津臣



3369 3/3 版 <いきま 旧事紀 622  
 3198 1/2 未2行 紀190 経10 次66行  
 3.192 赤964 8行 紀191 経13 #970  
 969 赤964 8行 紀191 経13 #970  
 962 赤964 8行 紀191 経13 #970  
 972 赤964 8行 紀191 経13 #970  
 3501 赤964 8行 紀191 経13 #970

200!  
 3189 9行  
 3194 未2行  
 3199 8行  
 3169 -445 同文

の子「梨津臣」とあり、同人というは、  
 用明二年四月に中臣氏の本家筋が滅んだ後  
 朝廷に出仕する「後継の」中臣氏（常磐・可  
 多能祐・御食子・鎌足ら）の祖になった、  
 と考えた旨述べた。（第十二章へ伊香刀美  
 へ降家）の項において既述）  
 「日本紀には、天種子命についで、  
 天見屋命の孫天押雲命の子  
 とある。（「日本書紀」上）日本古典文学大系、岩波書店、二頁注十三  
 「伊賀津命」「天見屋命」……雷大臣……天押雲命  
 天種子命  
 中臣氏本家筋の  
 という系図が考えられようか。（第十二章  
 へ伊香刀美、雷大臣の項参照）  
 ともあれ、天種子命は中臣氏の「本家筋」  
 にあたるの「あうう」と観察される。  
 一方、旧事紀、天神本紀においては、  
 「天三降命が豊国・宇佐・国造等の祖である」  
 と述べられている。（「日本書紀」上）日本古  
 典文学大系、岩波書店、一九〇頁、注一〇参照  
 なお、旧事紀、国造本紀には、  
 「檀原朝高魂尊・孫宇佐都彦命・定賜・国造」

3193 5行  
 3196 15行

本家筋に替わって



同文 1892<sup>2/3</sup>  
百利第 (23) 57<sup>P</sup>

3.193<sup>P</sup>

400! 3192<sup>P</sup> 3198<sup>P</sup> 962<sup>P</sup> 未

3369<sup>P</sup> 3194<sup>P</sup> 未  
3199<sup>P</sup>

八社 (中臣氏) 参照 荒筋第二編 『天照大神の天降り』  
に  
おいて既述)

とある。へ「日本書紀」(上) 日本古典文学大系  
岩波書店、一九〇頁、三一〇)  
・なるほど、これだけの資料では何ともいえ  
ないか、中臣の口傳系筋として、  
「伊賀津命へ天見屋命」―那志登美(梨津  
臣)―高魂尊―天三降命―宇佐津彦  
という系図が想像される。  
・とはいえず、高魂尊、天三降命、宇佐津彦は、そ  
れぞれ複数名が襲名した可能性もあろう。  
定かならないが、とりあえずこう  
――さらに――  
仮定し、後代の中臣氏にまつわる考察を行  
なしてみたい。

＊

一説に、  
「中臣氏の発祥の地は豊前であり、その子  
孫が藤原氏として古代貴族政治になうこと  
になつた」  
とする見解がある。(『世界大百科事典』平



3199P 8分  
前頁20分

国造  
3192P 来行

3345P 未  
3349P 攝関家  
1493

3.194P

3345P 未  
3349P 攝関家  
1246P

そうそふ  
曾祖父 1291P  
祖父の父 紀上561P  
天つ改行

と連は小科  
常磐 348P  
3349P

氏社へ中臣氏へ参照  
また、延喜本系には鎌足の曾祖父常磐につ  
いて、日始賜中臣連姓と記され、いので  
「古来の中臣氏の嫡系は仏教受容に反対し  
て滅び、常磐らが傍系から入って継いだ」  
とする説がある。（「日本書紀」(上) 日本古典文学  
大系、岩波書店、五六一頁至七九参照）  
そしてまた、宇佐氏は「――」攝関時代に  
なると、攝関家（藤原一族中の北家）を本家  
と「おおき」平安中期以後は大神氏を左倒して  
大宮司職を独占するようになる。（「大分県  
の歴史」渡辺澄夫、山川出版社、四三頁参照）  
「これら」のことを繋ぎ合せると、どうなるか  
と「なる」うか。  
あるいは、次のような経緯があったのかも  
知れない。  
① 中臣氏の嫡系である天種子命が宇佐津媛  
を妻とし、また中臣氏の傍系である宇佐津彦が  
国造を賜った（旧事紀、国造本紀に「檀原朝  
高魂尊孫宇佐都彦命定賜国造」とある）時点から数  
えて数十年の年月が流れた時、――古来の中

1291P 祖の父

前頁1157  
関(70)



紀下159<sup>P</sup>

天つぎ  
改行

3.195<sup>P</sup>

夫  
連

紀下150<sup>P</sup>  
紀下158<sup>P</sup>

紀下102<sup>P</sup>注8 (鎌子) 正系筋支系筋 334<sup>P</sup>  
紀下150<sup>P</sup>注3 (勝海) 562.55 (4)

562.55 (4)

562.55 (4)

562.55 (4)

宇佐氏の分家筋は  
宇佐に残

臣氏の嫡系は仏教受容に反対して滅んだ。  
②その後、中臣氏の傍系筋にあたる常磐(宇  
佐氏の正系筋)が始めて中臣連姓を賜わり、  
③そこで宇佐氏は、攝關家を本家と仰い  
だ、宇佐氏の正系筋から分かれて宇佐の地に残った支系筋の  
と、うなるとなっているのか。  
参考迄に述べると、  
一、欽明紀十三年十月条の中臣連鎌子、およ  
び敏達紀十四年条・用明紀二年条の中臣勝海  
大夫は、その当時、中臣氏の中心人物で  
あったろうと考えられているが、  
しかし、中臣氏系図に引く延喜本系帳には、  
鎌子も勝海も系譜上にその名が見られない。  
来ない。  
という。『日本書紀』(下)日本古典文学大系、  
岩波書店、一〇二頁注八。同一五〇頁注三参照。  
中臣氏の嫡系は、用明二年(五八七)四月  
に、中臣勝海連が斬殺された。絶えてしまった  
のだらう。  
あ、かも知れない。  
ことにより、  
■そこでこの後、中臣氏の傍系であるとはい  
え、天見屋命と二代目の天照大神の次男と

前4行

前4行

朝廷に

出仕するようになった

10



1509

第43表 中臣氏の系譜

天見屋命...常磐一可多能祐一御食子一鎌足

(「日本史辞典」東京創元社へ中臣氏参照)

・頁の右(もしくは左)へ縦方向に長く掲載下さい。  
・表の下に、文や字を入れないで下さい。(校正の時、ややこしいから)

\*

系、岩波書店、一〇二頁、注八参照)

察される。(第43表「日本書紀」(F)日本古典文学大

系、岩波書店、一〇二頁、注八参照)

中絶はあつたものの「中臣氏は、古来朝

廷の祭祀を掌つてきた中臣氏は、一時期の

中絶はあつたものの「中臣氏は、古来朝

廷の祭祀を掌つてきた中臣氏は、一時期の

中絶はあつたものの「中臣氏は、古来朝

中絶はあつたものの「中臣氏は、古来朝

中絶はあつたものの「中臣氏は、古来朝

中絶はあつたものの「中臣氏は、古来朝

中絶はあつたものの「中臣氏は、古来朝

中絶はあつたものの「中臣氏は、古来朝

中絶はあつたものの「中臣氏は、古来朝

中絶はあつたものの「中臣氏は、古来朝

中絶はあつたものの「中臣氏は、古来朝

中絶はあつたものの「中臣氏は、古来朝

常磐の曾孫に当る

3192P 3193ST

前頁3行







と、いうことになる。  
●宇佐氏の家系では、伝統的に、十七歳から  
い、で最初の子をもうけたのだらうか。  
●それと、宇佐氏系図は、親子相続だけで  
なく、兄弟相続などを含んでいるのだらう  
か。 (不明 要検討)  
い、や、もしかしたら、  
へ中臣の分家筋に当る天三降命の子が、宇  
佐津彦を名乗ってから以後、  
宇佐津彦の子孫達は、各自それぞれの名を持  
つと同時に、宇佐津彦という名を襲名し  
つづけた。  
ということなのか、知らない。  
とすれば、例えば一世代二〇歳とすると、  
●初代の菟狭津彦命 (天三降命の子であらう  
は、概略、西暦四九〇年頃の人である、とい  
う、  
●そして、西暦五二九年当時の宇佐津彦 (梶  
原朝 (神武朝) に国造を賜わった宇佐津彦)  
は、常津彦耳命か、稚屋だったらうか、と想  
像される。  
の、ではなか



H30(2018) 8.17(金) ~ 8.19(4回)

IF

H11.5.30(日) 91H11.5.30 3190<sup>1</sup>15  
H499(日) 3190<sup>1</sup>4.5  
⇒ 趣味 3190<sup>1</sup>4.5

3198<sup>1</sup>115  
3190<sup>1</sup>55 3,199<sup>1</sup>

200! 3190<sup>1</sup>55 九上記427<sup>1</sup>  
3192<sup>1</sup>209 3192<sup>1</sup>未

1423 趣向 林936  
3191<sup>1</sup>583 3191<sup>1</sup>1/2  
3191<sup>1</sup>2/2

さて、話を元に戻そう。  
足一膳宮での饗応を大層お喜びになった神武  
天皇の勅によって、突然にも挙行されることに  
なった。天種子命と宇佐津媛との婚姻の儀  
は、なごやかな中にも厳粛に、華やかに執り  
行われていったものと想像される。  
そして、多分この時、  
へ檀原宮御宇天皇(神武天皇)は、宇佐都  
彦命に、国造を賜ったのだらう。  
よくに思われる。(旧事紀、国造本紀参照 既述)  
この当時の宇佐都彦命は、後代の宇佐  
国造佐津彦の先祖に当る。  
そこで神武即位前紀に、  
「筑紫國の菟狹に至ります。時に菟狹國造  
の祖有リ。號けて菟狹津彦・菟狹津媛と曰ふ。  
乃ち菟狹の川上にいて、一柱膳宮を造りて饗  
奉る。云々」  
と述べられているのだらう。(第六十四章  
へ宇佐津彦の冒頭参照)

大要 3191<sup>1</sup>2/2 45



紀上212<sup>P</sup>

0522  
11/19

均等



紀上192  
未65行

紀上207~8<sup>P</sup>

3.201<sup>P</sup>

紀上192  
35行

宇治谷上85<sup>P</sup>

還る

林979<sup>P</sup>  
馬の口合33

馬の口合33

641<sup>P</sup>  
勒(書とる)

紀上192

船着場)に停泊した。(記・紀参照)  
■お待ちついた兵達は、馬の勒(馬の口に含ませる金具)をとり、歩いて大和の龍田に向かった。その道は狭く、長蛇の列となった。ことか出来ず、生駒山塊の西麓に沿いぐるつと、更に東の方生駒山を越え、中洲(奈良盆地北端のことであろう)に入ろうと願った。龍田に到ると、その東の方には、広大な湿地帯があった。そこは、茫漠とした湿原である。とはいえ、天上の国の都の地に比して考えられる神聖この上もない所だ。古代の人々は、この奈良盆地北端の地に天照大神の都を想ったことであろうか。しかし今はまだ、葦の葉が風にそよよいでいるばかりであった。雄大な都、華麗な都が忽然として曄煜くことかあるのだろうか。神武天皇は、龍田に到りて後、乃ち軍を

紀上192<sup>P</sup>  
大和の160頁  
勒



3,202<sup>P</sup>

562.5.6  
H11.5.30

紀212<sup>P</sup> 11斤  
③ 3200<sup>P</sup>

紀192<sup>P</sup> 76斤

紀参照)

引いて還さした。(神武即位前紀参照)  
こーして、神武天皇は、南へ南へと儀仗の  
隊列を進め、ついに夫の敵傍山の東南の檀原  
の地へ到らしたのであろう。(神武即位前

米

想像 前良 15斤  
想像 ③ 3200<sup>P</sup> 11斤



「小野小町」の  
136P 2行目  
ルビ付きに  
準ずる。

146 (記) 122頁 3206 18.19

(11)



④  $3289 \div \frac{3}{4} = 3708$

北、南を記載してある。



③  $3274^{\circ} - \frac{1}{4} 10 \sim 11^{\circ}$



・カヌ。左頁の上半分に、  
大きく掲載下さい。

→ 図のよみかた



3,203<sup>p</sup> - 3/4

笹百合を摘む巫女

神武天皇は笹百合の咲く三輪山の麓で、三輪山の神の娘・伊須気奈理比売を見初め皇后に迎えた。笹百合は、今も大神神社でたいせつに育てられている。

148<sup>p</sup>

写真図版 590

『大神神社・石上神宮』神社紹介(8)学習研究社、2003年1月2日発行、4頁参照

1304

注

注



3,203<sup>P</sup>-4/4

- ・カラー
- ・右頁の上半分と  
大きく載せて  
下さい。



1304

1404 写真図版 591 ヒカゲツカズラを頭にかざしササユリの花を手にま舞う舞姫たち

『植物の世界』(第12巻)朝日新聞社 1997年10月1日発行 90頁参照  
 1204 奈良県率川神社いさかわの三枝祭さんえだまつり(別名百合祭り)ゆりで、4人の舞姫が「五節ごせちの舞」を奉じる。6月17日 (写真:宇野五郎)  
 【大神神社の摂社】  
 日本経済新聞 391<sup>P</sup> 大神神社の摂社 149



同文 3210

ひと宿  
元(馬) 122

記(馬) 122  
元上130

3, 204<sup>P</sup> - 1/2

大神神社 34<sup>P</sup>  
元上322

右岸→川下に向って右 元197<sup>P</sup>  
大神神社 19<sup>P</sup>の図

○ 大神神社の拝殿の北の方を、狭井川と  
いう小さな川が西流してあり、この小川の右  
岸(北側)の岡(おか)の一角(いっかく)は、現在も  
出雲屋敷(いづもやしき)と呼ばれる。第416図参照  
その後年(こうねん)神武天皇の皇后になられた  
大神の女、媛蹈鞬(ひめだたら)五十鈴姫命(い  
ずずひめのみこと)の住居(すまい)があつたところ、  
と伝えられてゐる。○ 大神神社に中山和敬、  
学生社、八十九頁の図、三四頁参照)

○ 出雲屋敷と称されてゐるあたりで、  
大己貴(おほのおのむち)の血を引く三輪明神と、  
その娘媛蹈鞬(ひめだたら)五十鈴姫命(い  
ずずひめのみこと)とが暮らしてゐたのだらう  
と思われ。

○ 大倭国(大和)の天子である継体天皇(後  
の神武天皇)は、この美しい姫を見て妻に  
したいとお思ひになり、一宿、共寝されたと  
拝される。

○ 神武記に、伊須気余理比売命(いすけあまのりひめのみこと)の家、  
狭井河(さゐがは)の上にあ



3297 鏡皇命  
 3292 2/15 子ハ井の命  
 3292 2/15 3292 2/15  
 3204 P-2/2  
 3292 P 同反 3210 解説  
 122 3210 P 3行へ

か、歯止齒があるのか、それとも何等かの意図  
 日子ハ井命の名が見当らない。早世されたの  
 もつと、神武紀元年条には、長子である  
 一、二二頁。同一二二頁、注二参照  
 したのだった。〔古事記〕新潮社、一二〇  
 須気余理比売命との間に、三人の男の子が生  
 じたのだった。〔古事記〕新潮社、一二〇  
 とある。  
 そんな一宿か、幾年にもわたり、度重な  
 ていつたのであろう。  
 継体天皇（後の神武天皇）と伊  
 耳の命（後の綏靖天皇）三柱  
 井の命。次に、神八井耳の命。次に、神沼河  
 菅原の（清らかな）き小屋に  
 いかうて、あせ坐し、御子の名は、日子ハ  
 〔中略〕一、後に、その伊須気余理比売、宮  
 の内に参入りし時に、天皇御歌みたまひし  
 〔中略〕一、後に、その伊須気余理比売、宮  
 の内に参入りし時に、天皇御歌みたまひし

均等



③ 3,297<sup>1</sup>  
記(里)124頁45

神五神 神八神  
たけはたのみ  
建磐龍命  
3,205<sup>P</sup>

④ 3292<sup>P</sup> 早世1290<sup>1</sup> 紀上213<sup>1</sup> 注28  
記(里)122<sup>P</sup>

するところがあるのか、  
詳細は分らな

新撰

なお、姓氏録、右京皇別、茨田連系によると

次男の神八井耳命の子に彦八井耳命がいた、と

いう。(「日本書紀」(上)日本古典文学大系、

岩波書店、二一三頁、注二八参照)

また、神武天皇の孫に当り、神八井耳命の

御子である日建磐龍命は、阿蘇神社の祭神と

され、いる。「日本社寺大観」名著刊

行会へ阿蘇神社参照。第六十五章へ建磐龍

命の項において詳述。

そして、神武記の末尾近くに

神八井耳命は、阿蘇の君らが祖

とある。

とある。

\*







記(四)20<sup>P</sup> 紀上181E1<sup>P</sup>  
1中央 ↓下543<sup>P</sup>下

継体上皇「乎富等大公王」上宮記逸文  
 伊湏湏比売命を正妃とされた  
 と解される  
 尚、神武記には、次のような注記がある。  
 「是者悪其富登云事、後改名者也」  
 この注記について、普通、  
 「これは、その富登（陰部）という言葉を  
 嫌って、後に（比売多々良伊湏気余理比売と  
 名に）改名されたのです」  
 と解されており、一見、妥当なように思われる  
 一かし、野遊びしている七人の乙  
 女たちの先頭にいて、神武天皇に見初められ  
 一夜妻となつたころの物語に於ては、「伊湏気  
 余理比売」という名が用いられている。（記）  
 この姫は、もともと、伊湏気余理比売と  
 と呼ばれていたものであろう。  
 やがて、日乎富等大公王の皇后（東国の皇  
 后）にまでもなつてしまわれた。  
 東の天子を滅ぼした日乎富等大公王を  
 に思う人々は、日富登と云う事（密かに）、日  
 の事（ことごと）を悪んで、後に（密かに）、日

紀上<sup>D</sup>  
74  
5  
2M  
和に居る  
釈日本紀所引の  
症



みだ 狸 下 作 活  
みだ 狸 下 作 活  
みだ 狸 下 作 活  
みだ 狸 下 作 活

記(里)119'末

3,208P 記(里)120'末  
3040-3/4

記(里)120'末  
3277

こと

多良伊須須岐比売命と(皇后の)名を改め  
尊いあつたといふことなのではなからうか  
かいく、次のような話を作ったのだから、お  
神武天皇がさらに大后(皇后)とせ  
む美人を求ぎたまひし時、大久米命が白し  
く、  
ここに媛女あり。こを神の御子といふ。  
その、神の御子といふゆゑ(わけ)は、  
三嶋の皇女、皇は溝。後述の廁を流し  
る溝と関連づけられてゐるのである。昨は  
杵(矢)で男根の象徴、か女、名は勢夜陀多  
良比売、勢夜は兄矢(男根)。陀多良は立たら  
へ立てられる下の古形、その容姿麗美し  
ければ、美和の大物主神、大きな物を持つてゐる神  
見惑で、その美人の大便する時に、丹塗矢赤  
い男根に化りて、その大便する溝(便所は、  
川屋といわれるように、溝川の上ない傍に  
建てられていたことが分る)より流れ下りて

下 爲 尊  
前 6 行



H28(2016)5, 22(9) 観 土 3219<sup>1</sup>/<sub>2</sub>  
 ちとち「すし」は、  
 3,309<sup>1</sup>/<sub>2</sub>-3/4 105

馬込 3,209<sup>1</sup>/<sub>2</sub>  
 1371<sup>1</sup>/<sub>2</sub>

王様

同文 3277<sup>1</sup>/<sub>2</sub>, 3292<sup>1</sup>/<sub>2</sub>

めと 2174<sup>1</sup>/<sub>2</sub> そうい 11林 255<sup>1</sup>/<sub>2</sub>

富登 記(茶) 248<sup>1</sup>/<sub>2</sub>

その美人の口富登(陰部)を突き。いか  
 して、その美人驚き立ち走り伊須須岐  
 (跳び上って身振りした)すなはちその  
 矢を将ち来て、床の辺に置けば、たちまちに  
 震しき壮夫(血気盛んな男)に成りぬ。すな  
 はち、その美人を娶りて生みたまへる子、名  
 は、富登多多良伊須須岐比売命(女陰に矢を  
 立てられ身ぶるいた姫)と謂ふ。亦の名は  
 比売多多良伊須須岐比売と謂ふ。是者悪其  
 富登云事、後改名者也。故、ここをもちて神  
 の御子といふ。と神武記に述べられていふ。  
 物語の内に、少々度のきついこの  
 心の奥やり切れない想いを感に取らなけ  
 ばならないのかも知れない。  
 伊須須岐比売などという名前をつける苦か  
 親か自分の娘に富登多多良

(\*)







530 60才  
 -471 1  
 ③3058 2/3 59 59  
 改めて 紀上 212 年 3月  
 ③3206 1/17 年 4月  
 3,211 年  
 紀上 212 年 未2月  
 ③3214 2/2 年  
 ③120 年  
 紀上 213 年  
 紀上 213 年 (記号 119 年) ③3187 年  
 529 年 ③3188 年  
 ③3198 年  
 1/2

檀原宮での即位 (神武元年)

翌五三〇年のことであつたろうか。

正月一日 神日本磐余彦火火出見天皇

(神武天皇) は、日辺日本国の大王として  
 檀原宮で即位された。是歳を元年とされた。

神武天皇 (一) 後期継体天皇 (は、正妃であ  
 る比売多多良伊須気余理比売 (媛蹈鞰五十鈴  
 媛命) を尊んで皇后とされた。

ようするに

西の天上の国 (九州) の天子であつた時

継体天皇は千白香皇女 (武烈天皇の姉) を皇  
 后と定めておられたものの、重祚して東の日辺日本

(近畿) の天子となつた時、神武天皇 (後期

継体天皇) は、改めて、皇后を立てられたの  
 と拝察される。

なお、神武天皇 (継体天皇) は、もーも先

述の、たように四七一年に誕生されたものな

ら、この五三〇年の時、是では六〇歳



3,212<sup>P</sup>

仁賢11年  
武烈8年  
21年

ニと

④ 3204-2/2  
⑤ 3213-2/2  
HV

った計算になる。(第五十五章へ房太尊誕生)

の項参照)

ト<sup>ひめ</sup>とすれば<sup>たたら</sup>神武天皇と媛蹈鞰五十鈴媛命との

間に<sup>あいた</sup>生れた皇子神<sup>うま</sup>名川耳尊(後の<sup>のち</sup>経靖天皇

うは<sup>たの</sup>もうすでに<sup>せいじん</sup>成人<sup>なり</sup>ておられたこと

たろう、と想到される。

\*



3219 659

宣化天皇の皇位剝奪、そして崩御

それでは、西の方の情況につりてみてみる

東西二朝間の戦いに敗れた武烈上皇は、その後、どんな思いで過ごしておられたのだろうか。

物事の道理を考えると、武烈上皇の胸中は、押えよう加ないほど煮え滾っていたに

違いない。雄略天皇の遺詔を踏みにじり、天下を

思いのままにしてよいものか。正統な天子は、朕なるぞ。

ここに武烈上皇は、囚われの身であるとはいえ、獄の中から頻に諸の悪をしたもう左のかも知れない。(武烈即位前紀冒頭参照)

だが、幽枉は、必ずや顕わさるものがある。それは、辛亥年(五三一)の前年(五三〇)神武天皇(後期継体天皇)即位の年

の二月十日のことであつたらうか。神武天皇は、宣化天皇の皇位を剝奪された。



紀上528<sup>P</sup>

③231<sup>P</sup> 同文

ただ 直ちに 1314<sup>P</sup>  
1715

3.214<sup>P</sup>

即座 1301<sup>P</sup>

③218<sup>P</sup> 同文  
③216<sup>P</sup> 同文  
15行 紀下59<sup>P</sup>

陰事 166<sup>P</sup>  
相争 ③211<sup>P</sup> 17行  
次 ③211<sup>P</sup> 10月とある

欽明即位前紀に、  
天皇

紀下36<sup>P</sup> 新  
③231<sup>P</sup> 14行

と想像される。  
・恐らく、陰事が発覚したのであろう。  
・宣化紀四年二月十日条に、  
「(宣化)天皇、檜隈廬入野宮に崩りま  
ぬ。云々」  
とある。  
①その詳細は定かでないものの、  
武烈上皇と宣化天皇との密に  
報が東の日辺日本国の神武天皇(後期継体  
天皇)のもとへ急ぎ伝えられ、  
皇の皇位(加)即座に剥奪された  
と考える。  
②神武天皇(後期継体天皇)は、直ちに、西  
の都へ上洛されたのだろう。  
③神武天皇の教(い)怒りは、我が子宣化天皇  
の皇位を奪い去っただけでは済まなかった。  
天皇位が剥奪された(加)即座に、  
同年(五三〇)十月に、宣化天皇のみならず、  
皇后橘皇女(仁賢天皇の娘、継体皇后  
白香皇女の妹、武烈天皇の姉)、および其の  
孺子までも、誅せられて、死罪を賜った。  
ようである。

十月 山崎



紀下63P  
前頁に2月とある

紀下60P

3.215P

978P  
車能へ  
299起るく

「(宣化<sup>セカ</sup>天皇)四年冬十月、  
天皇(宣化天皇)崩<sup>かむあか</sup>りまゝぬし  
とあり、

日本書紀

・そして、同年の宣化<sup>セカ</sup>天皇四年十一月十七日条

に

「(宣化<sup>セカ</sup>)天皇を大倭国<sup>むさしの</sup>の身狭桃花島坂上<sup>さかのうの</sup>に葬<sup>はぶ</sup>りまつる。皇后橘皇女<sup>きさぎ</sup>及び其<sup>かむさ</sup>の孺子<sup>わくご</sup>を

以て、是<sup>み</sup>の陵<sup>いり</sup>に合<sup>あ</sup>せ葬<sup>はぶ</sup>る。皇后の崩<sup>かむさ</sup>りまゝし

年、傳記<sup>ひととな</sup>に載<sup>の</sup>する<sup>こと</sup>無<sup>な</sup>し。孺子<sup>わくご</sup>は、蓋<sup>けだ</sup>し未<sup>いま</sup>

だ成人<sup>な</sup>らずして薨<sup>う</sup>せませるかし

と記<sup>き</sup>されてい<sup>る</sup>。

なお、平子鐸<sup>ひらこたけ</sup>嶺<sup>のり</sup>氏は、

「この合葬<sup>がっそう</sup>は、皇后<sup>きさぎ</sup>と幼児<sup>ようい</sup>が、宣化<sup>セカ</sup>天皇と

同時<sup>どうじ</sup>に世<sup>よ</sup>を去<sup>さ</sup>った<sup>こと</sup>によるし

と解<sup>かい</sup>釈<sup>しやく</sup>してい<sup>る</sup>。(「日本書紀」(下)日本古典

文学大系、岩波書店、六〇頁<sup>下</sup>注二参照)

・恐らく、そうした悲惨な事態に至ったので

あろう。

次頁から

前頁39  
二月の月

武小廣國押省

次々取4行



$3,216^P$ 

① 宣化天皇と皇后及び其の御子か、同時に死  
 を賜わったのか、  
 ② それとも、――〔死去後〕ただたんに合葬し  
 た、というだけのことなのか、  
 等々考え得るわけであり、詳細な状況は分ら  
 ない。種々の場合が考えられるわけである。

③ 宣化天皇は、辛亥年（五三二）の前年（五三  
 十月）に死を賜わった。（第一表参照）

宣化天皇の遺骸は



3.217<sup>P</sup> - 1/2

日本書紀  
1029<sup>年</sup> 天武天皇  
大和朝 73.76<sup>年</sup>  
大和朝 1415<sup>年</sup>

大和朝 3215<sup>年</sup>  
大和朝 60<sup>年</sup>  
28<sup>年</sup>

大倭国に（九州）に築かれた陵に焼く葬られた。

その後（聖徳太子の金人の夢告以後）宣化天皇の陵墓は、大倭国に（九州）から

日辺日本国（大和国）へ移された

と解いた。

宣化天皇の陵墓について

延喜諸陵式には「在大和国高市郡北城東

西二所・南北二町、宇戸五烟」と記されており

・陵墓要覧（宮内庁書陵部編、一九五六年）には

「所在地、奈良県高市郡畝傍町大字島屋字見三才（今、橿原市島屋町）と

前、後円墳、皇后橘仲姫皇女と合葬」と記載されている

という（日本書紀）（下）日本古典文学大系、岩波書店

六〇頁、注一、日本史辞典、東京創元社、（陵墓）参照

（\*）ところて、

「安閑・宣化の両陵の規模が、二の前後の

諸陵より小さいのは、二朝並立の事情による

のであろう

とする説がある。（「日本書紀」）（下）日本古典

文学大系、岩波書店



3.217<sup>p</sup>-3/2

文学大系、岩波書店、六〇頁、注一八喜田貞

吉（参照）

①安閑天皇は、何らかの事情により、退位さ

れたと考えられる。（第一表参照）

②そして、宣化天皇は死を賜わったようであ

る。

すなわち、安閑天皇も宣化天皇も、不運な生

涯を過されたように想到される。

③さらにまた、安閑・宣化天皇は、共に、後

代の天皇の直系の先祖でもない。

■そこで、

へ、聖徳太子への金人の夢告以降、大和国に

築かれた両陵の規模は、小さなものにされ

た。

ということなのであろうと推察される。

\*



531 82 487 17才 527 57 539 73 3218 - 1/3 530 539年 3214 同 紀小 490 3228 - 1/2 19年  
 471 1 471 1 471 1 467 1 18 1才 17才 宣化 17才 1才 16才 安南 宣化  
 81 16 16 56 56 12 12 3.218 - 1/3 59才 68才 紀下 59才

安閑天皇と宣化天皇の享年

第1表によれば、欽明天皇即位の年

宣化天皇の崩御の年について、宣化紀四年

本書紀の紀年によれば、五三九年、但し、五三

〇年、二月十日条に、

「(宣化)天皇、檜隈廬入野宮に崩りま

ぬ。時に年七十三

と記されている。

しかし、宣化天皇が七十三歳迄生きてお

られた、とは考えにくい。\*第1表によれば、

父継体天皇より、宣化天皇の方が年上にな

った、というからである。五三九年、五三〇年崩御に

この物語では、仮りに、

・継体天皇は、四七一年に誕生された。

・継体天皇十七歳の時(四八七年)に、安閑

天皇が誕生された。

・継体天皇十八歳の時(四八八年)に、宣化

天皇が出生された、

と考えてみたい。

先に引用したとおり、継体紀二十五年(日本書紀の紀  
 年で五三一年)条には、



紀F60<sup>P</sup> 539 73才 535 69 3,218-7/3 紀F56<sup>P</sup> 535 70才 82才 77才 継体 82才  
 新(里)266<sup>P</sup> 531 66 66 1才 差 16 66才(安閑66才) 赤3014<sup>P</sup>

次頁から

察するところ、

① 継体二十五年(五三一)に、  
 継体天皇八十二歳崩  
 安閑天皇六十六歳  
 宣化天皇六十五歳  
 ② 安閑二年(日本書紀および古事記の紀年で  
 五三五年)に、  
 安閑天皇七十歳崩  
 宣化天皇六十九歳  
 ③ 宣化四年(日本書紀の紀年で五三九年)に  
 宣化天皇七十三歳崩  
 となる。

「継体天皇崩。八十二歳」とある。第五十三章へ継体天皇晩年の不可解な記事を中心に、  
 察するところ、継体紀二十五年(五三一)系を基準  
 として、次のように算出されたものと思われ



H11.6.5(土) H30(2018)8.18(土) ~ 8.19(4回) 3156P  
 令和元(2019)8.16(金) ~ 8.16(3回) 322P  
 令和2(2020)3.29(金) ~ 3.29(4回) 322P  
 令和2(2020)12.23(木) ~ 12.23(4回) 322P

実際 322P - 1/3 4P  
 530 60  
 471 1  
 59 59  
 60 16(差)  
 44 16

述  
 第六十章 欽明天皇二十一年(五十一)年生れと仮定  
 武烈上皇二十二歳、もくは三十二歳(後述)  
 宣化天皇四十三歳、  
 安閑上皇四十四歳(五三五年崩か)、  
 継体上皇六十歳(四七一年生れとする)  
 五三〇年の時点では、  
 一かゝ實際には、辛亥年(五三一)の前年  
 と、日本書紀に記述されたのではなからうか  
 宣化天皇崩七十三歳(宣化紀四年二月条)  
 安閑天皇崩七十歳(安閑紀二年十二月条)  
 単純計算によつて、  
 欽明天皇二十一年(五十一)年生れと仮定

12/26  
 12/25  
 (米)

前頁